

TV 報道検証【報道特集】 報告書

テレビ局：TBS	番組名：報道特集	放送日：2019年8月10日
出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、宇内梨沙 岡田沙也加（気象予報士）		
検証テーマ：オープニング、北朝鮮のミサイル、国民民主党の両院議員総会 【特集】松本零士さん・福田元首相が語る戦争・台湾の元日本兵が語る戦争		
<p>報道トピック一覧</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・交通機関のラッシュは今日がピーク</li> <li>・オープニング</li> <li>・きょうも各地で猛暑日</li> <li>・北朝鮮のミサイル</li> <li>・国民民主党の両院議員総会</li> <li>・アメリカで核兵器の恐ろしさを伝える試み</li> <li>・本家よさこい祭りが高知で開幕</li> <li>・きょうも札幌でヒグマが出現</li> <li>・アメリカの銃乱射事件</li> <li>・横浜二人殺人未遂で無職の男を逮捕</li> <li>・東京五輪に向けて予約制コインパーキングの実験</li> <li>・千葉県木更津市で高齢女性が運転する車がビルに突っ込む</li> <li>・【特集】松本零士さん・福田元首相が語る戦争・台湾の元日本兵が語る戦争</li> <li>・スポーツ報道</li> </ul>		
<p>放送法第4条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オープニング：結論→特に問題なし 番組の冒頭で金平キャスターが「終戦から74年、戦争の犠牲を経て自由を手に入れた日本はずの日本では愛知県の芸術展で一部の展示が中止になるという異常事態が起きています。大きな意味ではこれも戦争とは無関係ではないでしょう、人口の大部分が戦争を知らない世代、今日は特集全枠で戦争を実際に経験した世代から話を聞きます。」とコメントしていた。このコメントに当てられた時間は23秒で放送法上は特に問題は見られなかった。</li> <li>・北朝鮮のミサイル：結論→特に問題なし スタジオでの日下部キャスターの「次です、北朝鮮がまた短距離弾道ミサイルと見られる飛翔体を発射しました。この2週間あまりで5回目ですけれども、今後も続く恐れがあります。」というコメントを導入に以下に朱記したVTRが取り上げられていた。 ナレ「韓国軍によりますと、北朝鮮は今朝、東部咸興一帯から日本海に向けて短距離弾道ミサイルと推定される飛翔体を2発発射しました。飛行距離は400キロあまり、高度はおよそ48キロと分析しています、発射の目的について韓国大統領府は米韓合同軍事演習への牽制と新型短距離弾道ミサイルの性能の確認だとしています。発</li> </ul>		

射はここ 2 週間あまりで 5 回目ですが演習は 20 日まで行われることから北朝鮮は演習を牽制する形で今後も発射を続ける恐れがあります。日本政府は我が国の安全保障に直ちに影響を与えるような事態は確認されていない、とコメント。ただ、こう懸念を表明しました。」

原田憲治（防衛副大臣）「北朝鮮が弾道ミサイルを含めて関連技術の高度化を図っている中で、北朝鮮の核ミサイル開発というのはですね、我が国を含む国際社会に迫っつての深刻な問題で。」

"ナレ「一方、これに先立ちアメリカのトランプ大統領は北朝鮮の金正恩党委員長から新書を受け取り、その中で金党委員長が米韓合同軍事演習に不満を示していることを明らかにしました。」

トランプ大統領「金党委員長は演習快く思っていない、私も好きじゃない。費用を支払いたくないからだ。」

ナレ「トランプ氏は金党委員長に同調した上で、ミサイルの発射を繰り返していることについて、全て短距離だと問題視しない考えを強調。四回目の米朝首脳会談に意欲を示しました。」

このトピックに当てられた時間は 126 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・国民民主党の両院議員総会：結論→特に問題なし

国民民主党の両院議員総会について膳場キャスターが「国民民主党は両院議員総会を開き、立憲民主党に対し衆参両院での統一会派の結成を求める方針を正式に決定しました。国民民主党の執行部は立憲民主党から呼びかけられた衆議院での統一会派の結成を巡って衆参両院での統一会派の要求や政策の方向性についての協議を申し入れることを今日の両院議員総会で提案しました。一部の議員からは先月の参議院選挙の総括が済んでいないなどの意見も出たということですが、提案については野党の大きな塊を作り政権交代を目指すとして、了承されました。先月の参院選では議席を争った選挙区もあったため両党の間で感情的なしこりも指摘されますが、玉木代表は色々あったがそれらを乗り越え大局的な判断をすべきだと強調しました。」と伝えていた。

このトピックに当てられた時間は 58 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・【特集】松本零士さん・福田元首相が語る戦争・台湾の元日本兵が語る戦争：結論→特に問題なし

スタジオでの膳場キャスターの「特集は 74 年前の戦争について全編通してお伝えします。漫画家の松本零士さんは自身が見た終戦の光景を絵にしてくれました。」というコメントや金平キャスターの「福田康夫元総理には戦争と記録の重要性について、さらに先の大戦が今も影を落とす北朝鮮との交渉について聞きました。」コメントを導入に以下に朱記した VTR が取り上げられていた。

"ナレ「漫画家、松本零士さん 81 歳、宇宙戦艦ヤマトや銀河鉄道 999 など、大ヒット作品を世に送り出してきた。初めて戦争の恐怖を覚えたのは本土空襲の激しくなった昭和 20 年、7 歳だった。母の実家がある愛媛県、今の大洲市でのことだ。」

松本零士「宇和島の方から連日連夜 B29 の大編隊が呉広島の方に向かってくるわけ、頭上を超えていくわけですよ、で行き帰りに余った爆弾は落とす、機銃掃射も受けました。」

膳場貴子「機銃掃射も」

松本零士「そうです。」

"ナレ「広島の方には海軍の飛行場や兵器工場があった、集中的な空襲を受けていた映像が今も残る。松本さんはこの部隊から機銃掃射を受けたという。」

膳場貴子「機銃掃射は巻き込まれたんですか。」

松本零士「そうです。実際に撃たれてるのは家の蔵に母親に抑え込まれて、でタタタタタタっていったあとに行ってみたら機関中のたまがめり込んでいるわけ。」

ナレ「近くの山や川で遊ぶ活発な子供だった。実は、漫画家としての原点は戦時中に見たアニメにあるという。」

松本零士「戦争中なんですけど実は家ではミッキーマウスとかポパイも見ていますよ。」

膳場貴子「舶来と言うか敵性のアニメですよ。」

松本零士「戦つとる相手ですがその世界にはアレがないですね。だから横山隆一さんのフクちゃんの潜水艦だとか、色んなものを全部見ているんですよ。」

ナレ「フクちゃんの潜水艦は昭和 19 年に作られた国威発揚の映画だ、子供に人気のあった主人公、フクちゃんが潜水艦に乗って街を砲撃したり魚雷でアメリカの空母を沈めたりしている。当時の漫画はどんなものだったのか。」

"膳場貴子「今では娯楽、文化として愛されている漫画ですが、戦時中は今とは全く違ったものでした。その当時の貴重な漫画の資料がこちら、川崎市市民ミュージアムに保管されています。」

ナレ「笑みを浮かべるのは太平洋戦争を始めた首相、東条英機、青く化け物のように描かれているのはアメリカ大統領のルーズベルトだ。これらは漫画という成人向けの雑誌で昭和 14 年以降のものが所蔵されている。漫画からは人々の空気感が伝わってくる。寝坊した夫と子供を妻が起こす様子を描いた漫画では」

音声「屠れ米英、我らが敵だ、この一戦、何が何でもやり抜くぞ、進め 1 億火の玉だ。」

膳場貴子「苦笑いしながら当時の人達はこれを読んでいたんでしょうかね。」

"ナレ「一枚の絵でメッセージを伝える作品も多い、遡上の敵というこの漫画は富士山をバックに日の丸の戦闘機がアメリカ兵に体当たりしている。」

膳場貴子「いや、まさにこれは特攻、特攻隊ですね。」

ナレ「これは、敗戦の一面前に発行された決戦漫画集という作品集だ。産めよ増やせよと題された漫画は、」

膳場貴子「いやですねえ、もう兵隊さん予備軍ということですよ、で子供をいっぱい生んで兵士にしましょうということだものねえ」

ナレ「著名な漫画家の作品もある。」

膳場貴子「ほんとわかる、だってこれ髪型ワカメちゃんといっしょ。」

ナレ「僕の訓練というこの漫画はサザエさんで知られる長谷川町子さんの手による。」

漫画の少女「あら、変な漕ぎ方だわ」

漫画の少年「少年航空兵の試験の訓練だよ。」

ナレ「フクちゃんの作者、横山隆一さんはインドネシアのジャワ島に従軍した際の様子を得にしていた。」

膳場貴子「壊れた橋をわざわざ渡って第一番に突入した兵隊さんの気持ちになりましたですって。へえ、従軍記者じゃなくて従軍画家さんということか。」

ナレ「手のひらサイズの漫画日誌は戦地の兵隊に送られたものだ。太平洋戦争の口火を切った真珠湾攻撃、それ以降の戦果ばかりが強調されている。雑誌の漫画は戦況が悪化した昭和 20 年も発行されていた。髪質からも物資の乏しくなっていた状況がわかる。都市部の空襲が続いていたため、地方に疎開する妻と子供を見送る漫画が描かれている。戦時中の漫画について松本さんは自分なら描けない、としつつも当時の漫画家の心情をこう推し量る。」

"膳場貴子「漫画家たちが国威発揚のためにプロパガンダに協力しなければならない、ってなったらどういう気持ちだったんだろうね。」

松本零士「でもやっぱり、それはそれでやらざるを得なくなると思いますね、その立場上ね、自分の志や信念とは違う方向に進む場合がありますよね、だからそういうものがあるから戦いというのは残酷無残なものなんだ。」

"

"ナレ「8月15日松本さんは日本の敗戦を川遊びの最中に知った。」

松本零士「戦争が終わったぞと、おっさんがメガホンを持って土手の上を走っていったんですね。だから、慌てて家に帰ったら婆さんが家中の雨戸を閉め切って、刀、薙刀、槍全部を出してね、こう磨いているんですよ。」

膳場貴子「なんでですか。」

松本零士「いや、それでどうするんって聞いたら、敵が来たらこれで刺し違えて死ぬのじゃ、敵が来たらチャンバラやるんだって思ったんだ。そうじゃないんです、日本国落城でしょ、家族で刺し違えて死ぬという意味だったんです。」

"ナレ「結局、占領軍は来ず、集団自決は免れたその二日後。松本さんは決して忘れられない光景を目にしたという。今回、その景色を描いてくれた。終戦の2日後ですよ。真っ赤な夕日を前に佇む麦わら帽子の少年は七歳だった松本さんだ。目線の先にある無数の影は。」

ナレ「これは宇和島からゼロ戦飛行隊が夕日の前を横切ってシルエットになって全部離陸して今度は北の方の本土のどこかの飛行場に飛んだんで、どんな映画よりもダイナミックな幅広いすごい眺めだった。それが終戦の記念として自分の心に残った。負けたんだな、と一緒に大日本帝国の飛行部隊の姿を見た、飛行機を見た最後の日。」

ナレ「松本さんの父、強さんも戦闘機のパイロットだった。南方での戦いから帰国したのは敗戦の二年半後、攻撃する側の複雑な心境を話してくれたという。」

松本零士「自分が相手を追い詰めた時、相手のパイロットを振り返ると、相手にも死ねば悲しむ子供や家族がいると思うけれど鬼になって撃たなければ、って言うて戦争は人間を鬼にするんだ、って言うて二度とやってはいかんというのでうしょ。私はちびですからピンとこないからね、今度やるときはやっつけなきゃいかん、という馬鹿なことを言うなとそんな事を言うからあんなに大勢の戦死者が出るんじゃないかと怒られたことがある。」

"ナレ「強さんをモデルにした人物が登場するのが宇宙戦艦ヤマトだ。ヤマトは放射性物質に汚染された地球を救うため宇宙人と戦いながら銀河を旅する SF 漫画だ。」

松本零士「沖田艦長ですね、アレは実は私のオヤジの似顔絵をそっくり使っているんですよ、あんな顔をしていたんですよ、髭はやして。」

ナレ「ヤマトの沖田艦長、部下に繰り返し死ぬなど話すシーンがある。これも父の影響だという。」

松本零士「人は生きるために生まれてくるんだ、死ぬために生まれてくる命はないぞ、という。それが口癖だったんです、そういう教育を激しく受けたのであそこでつい使ったんですね。」

"ナレ「松本さんはキャプテンハーロックや戦場シリーズなど戦争をモチーフにした作品を描いてきた。そこには洗淨だけにとどまらない戦争の現実がある。」

松本零士「帰ってこれなかった家族の苦難の現実というのをこの目でわかっているんですよ、それから帰還兵で生きて帰ったのに家族が死んで帰る場所がないんですね、そういうのを現実としてこの目で見ているわけ、人は志を持って生まれてきたのにそれを果たせずに終わっていく悲しみですね、それを書きたかったわけです、少年の日からですね。」

ナレ「松本さんと同世代で、あの戦争を体験した政治家がいる。」

"金平「あ、こんにちは」

ナレ「福田康夫元総理だ。83歳になった今も、あの日々を鮮明に覚えている。」

"金平「いわゆる軍国少年ですか？」

福田氏「そうです。そのとおり、まさに軍国少年。竹を切ってきて、竹やり作るんですよ。竹削って。それでまあパラシュートでもおっこつてくりゃあ、それを下から突つこうと。言うぐらいなね。こどもごろころに考えただけです。うん。」

ナレ「敗戦 10 日前の夜、疎開先の群馬県で、前橋空襲を目撃した。9 歳だった」

"金平「前橋空襲ってのは、遠くから？」

福田氏「まあ 10 キロ、20 キロはなかったでしょう。ですからよく見えましたよ。その夜はね。夜、もう真っ赤になってね、まあ焼夷弾ですか、パラパラ落っこってくるわけですよねこっちのほうまで延焼するんじゃないかと、言う心配をするくらい、ええ本当によく思い出というかね、そういうことがありました」 "

ナレ「一面焼け野原となった市街地。8 割が焦土と化し、535 人が亡くなった。甚大な被害を伝えるこれらの写真は、福田さんが戦後、アメリカで探し当てたものだ。」

"福田「これも、私がね、ワシントンの、アメリカのね、公文書館から入手したものですけどね。

金平「どうして入手しようとなさった？」

福田氏「それは、結局日本には無かったんですよ。そういうものがそういう記録は無いんですよね、向こうはみんな戦果報告するのために飛行機の上から取るわけでしょう。自分たちはこう言う風にやりましたと。」 "

ナレ「アメリカの国立公文書館は、第二次大戦前も含め、膨大な資料を保存し、公開している。」

福田氏「本当に、簡単に見れたわけですよ。でそこに行ったら、ロッカーが置いてありましてね、引き出し開けたら、バツと、出てきたわけですよ。あっという間に出てきた。ね、これはすごいもんだなと。そのことに感心をしました。」

ナレ「この経験がきっかけとなり、官房長官時代、そして総理就任後も、公文書管理の法整備に取り組んだ。」

福田氏「まあ今、思えばですね、日本にそういう公文書に関する法律が無かったということ、これがね当時、驚きでしたけれどね。しかしそういうものをですをね、保存してなおかつ、アメリカのように万民にね、それを見てもらうというそういうようね設備もなかったと、」

ナレ「これは、太平洋戦争中の、日本の最大勢力範囲を示したものだ。昭和 17 年、領土は東アジアから東南アジア、南太平洋まで拡大した。侵略の歴史は、戦後も色濃く影を起こしてきた。1974 年、田中角栄総理が、東南アジアを歴訪した際には、戦後の経済政策を含め、激しい反日デモが起きた。この 3 年後、福田さんの父、福田赳夫総理も、東南アジアを訪れ、外交の基本原則、いわゆる福田ドクトリンを打ち出した。福田さんは、当時父の秘書だった。」

福田氏「福田三原則というんですけどね、第一はですね、日本は軍事大国にはならないと、第二がですね、心と心の通い合う付き合いをしていきましょう第三がですね、東南アジアとパートナーでね、これからやっていきましょうと、そういう呼びかけなんですよ。ということはね、他の国からはね、アジアの国からは、そうとはみられて無かったということ、なんですよ。」

ナレ「官房長官だった 2002 年 8 月には、小泉総理が北朝鮮を電撃訪問した。金正日総書記と、握手を交わし、早期の国交正常化を目指す日朝平壤宣言に署名したのだが、」

"金平「戦後の負の遺産を一気に吹っ飛ばすような可能性は、あったというふうに？」

福田氏「一つのいい、機会であると、言うようには思ったんですけどね、要するに相手次第です。北朝鮮の核をですね、どういうふうに決着させるかということ、で、当時の、金正日、彼氏がそこまで踏み切ったかですよ。核をね失くしてもいいということを考えたか、そこまでやってないから、詰めてないから。デモね、金正日とすると、もう決着したいと思ったかもしれない。あの時に。」 "

ナレ「一月後には、拉致被害者 5 人が、帰国した。しかしその後、拉致問題は解決せず、国交正常化交渉も進んでいない。」

福田氏「あれだけの人たちをかえってきたわけですからね、まあそれでも満足すべきか、もう少し追及すべきだったか、もう少しやれたんじゃないかかねと私には、思ってます。もっと突き詰めていけばね、という期

待も実は持ったんですよ。もしそれができればね、これはもう、本当に画期的なことですよ。日本の外交としてもね、ええそしてまたこの地域のね、安全保障関係、これも一転するわけですよ。で、そういう意味において言えば、私はああいう今のような状況になってしまっているってことは、非常に残念だと、言う思いは今でもしています。」

VTR を受けて、スタジオでの膳場キャスターの「さて、先の大戦では、日本の統治下にあった台湾の人たちも、日本軍として動員されました。」というコメント、日下部キャスターの「インパール作戦など、戦史に残る激戦を生き抜いた彼らは、九十歳を超えた今も、日本語で、餓死が怖かったと話します。」というコメントを挟み、以下に朱記したように台湾の元日本兵について VTR で取り上げられていた。

ナレ「6月、22日、沖縄平和記念公園。異例の日を翌日に控え、台湾人戦没者のための法要が行われていた。戦時中、日本の植民地だった台湾。20万人が日本軍の兵士や軍属として動員され、3万人が命を落とした。毎年行われているこの法要に、台湾人元日本兵らも出席した。戦後、74年を経た今も、日本語を話す。」

陳金村さん「日本の兵隊だから、国のため、天皇陛下の為、人民のためがあると、僕らは努力して、国のために守ったというように」

林才壽さん「なんとも言えない残念です。僕たちはね、一生懸命やりましたけどね、負けるとは思いませんでした。」

ナレ「今も心は日本人だ。と語る元兵士たち。当時歌った同期の桜を、皆が覚えている。台湾に残る日本軍の歴史を訪ねた。かつて、日本の植民地だった台湾、」

日下部正樹「おお、海外で安全な鳥居っていうのを見るのは珍しい、それとその参道、これものこっているんですけども、ただ、よく見ると神社の本殿があるべきところが道教の陵なんですよ。」

ナレ「日本軍の基地も多く残っている、海を臨むこのトンネルもその一つだ。入口付近は天井も平たく作り直された形跡もあるが。」

日下部正樹「10メートル、15m位かな、あ入ったところに明らかに形が変わっているんですね、ここです。」

ナレ「天井は半円状になっていて壁面廃止が組まれている。後年前に発見されたこのトンネルは日本陸軍の兵士が海側と山側を行き来するための通路だったと見られている。」

日下部正樹「ほらきた、コウモリが飛んでいます、突然の侵入者に驚いているんじゃないですか。」

ナレ「暗くて狭いトンネルは今、コウモリの巣になっている。」

日下部正樹「天井のコンクリートとか今かなり頑丈になっている。」

ナレ「中腰で奥へと進む、一部崩れている部分もあるが、70年異常たつた今もほぼ原型をとどめている。」

日下部正樹「あれ、何のアナだろう、これ。穴を作ったっていう呂いあいちゃったということで爆撃がこう落ちたということなんだろうか、何れにせよですねこのトンネルはまだ先まで続いています。アメリカ軍の上陸に備えて非常に強固な地下壕をほったということなんでしょうね。」

ナレ「台湾は日本軍にとって東南アジアに向けた軍事の要衝だった。大戦末期フィリピンを攻略された日本は次は台湾が狙われると考え、その防衛に力を注いだ。その時に作られた日本海軍の施設跡が南部屏東県で発見されている。見つけたのは歴史研究家の念吉成さん、それは対岸から500メートル離れた川の上流にあるという。近くには台湾軍の基地があり、この日は軍事演習が行われていた。草むらをかき分けて進むと……。ここは日本軍で海の特攻兵器と呼ばれたボートの格納壕だった。その名は震洋。太平洋を信用させるという意味で名付けられた。全長5メートルほどでベニヤ板できている。これは日本で復元された震洋だ。海の色に似せた塗装からアオガエルとも呼ばれた。ボートの前方に250キロの爆薬を積み込む、そしてそのまま兵士もろとも的に突っ込むという残酷な特攻兵器だ。震洋部隊の2500人以上が命を散らしたが戦果は少なかったという。」

日下部正樹「この中に2隻収容できたらしいですね、これは雨水ですよ。相当水が溜まっていてとても中には入れるような状況ではないですよ。」

ナレ「格納壕の建設は秘密裏に行われた。」

念吉成さん「地方の業者に壕を作らせ別の業者に木を植えさせました。連合軍も見つけられませんでした。」

"ナレ「この格納壕の周囲には土砂が溜まっているが、元々は壕の前に震洋を運ぶレールがあり目の前の革まで続いていた、そこから海に出たという。台湾には連合軍の上陸に備え、沖縄から精鋭部隊が移されるとともに10の震洋部隊が配置された。だが、連合軍が目指したのは手薄になった沖縄だった。このため台湾の部隊への出撃命令はついにくだされなかった。」

日下部正樹「しかし、ここがね、海洋特攻の基地があるとはとても思えませんね。ここで取材をしても盛んにこう砲撃の音がするんですね。聞こえましたがけれども、70年以上たった今もここが非常に軍事的に重要な拠点だ、要衝だということがよくわかりますね。」

ナレ「台湾南部高雄には見つかったばかりの震洋部隊の基地の跡がある。今年になって土の中から発掘された。戦後、この基地後には中国から逃れた国民党軍とその家族が移り住んでいた。そのため、区画整理が行われるまで基地の存在が一般に知られずにいたのだ。この施設には震洋部隊の司令部があったのだと見られている。中に海外メディアが入るのは始めた。」

日下部正樹「本当にこのL字型に通路ができています。長方形の部屋ですよ。本当に歴史が埋もれていた現場ですよ。」

"ナレ「沖縄で同期の桜を謳っていた陳金村さん。高雄の震洋部隊の一人だった。」

陳金村さん（元震洋特攻隊、92歳）「沖縄に派遣された戦友はもうみんな、全滅、亡くなっています。戦死した。沖縄は上陸されたもんだからと言うてね、やっぱり当時相当恐ろしかった。恐ろしい戦いだったと思う、僕らもずっとそういうつもりで準備しとったから。」

"ナレ「激戦を生き抜いた台湾の元日本兵たちは今何を思うのか。既に90歳を超えた元兵士3人に話を聞くことができた。蘇献成さん92歳戦況が悪化するニューギニア島の拠点の一つ、ウェワクにいた。」

蘇献成さん「日本から来た船がな、ほとんど途中でね、途中で撃沈された。それで糧秣もない、軍備もない、薬もないなにもない。」

ナレ「ニューギニア島での激しい戦闘を記録した映像が残る。だが、死者の多くは戦って亡くなったわけではなかった。」

蘇献成さん「ニューギニアにおった兵隊の多くは餓死でした。餓死はね、米兵よりも怖い。」

日下部正樹「アメリカ軍より、餓死のほうが怖かったんだ。」

蘇献成さん「餓死が怖かった。なにも、実際に何も食べ物なかったですし、なにか食べ物があったら死んでも構わない。」

ナレ「蘇さんの部隊は後方拠点のホーランドディアへと退却した。だが、ここも数万の日本兵が命を落とす激戦地となった。」

蘇さん「わたしが、ホーランドディアについた翌日艦砲射撃された。」

日下部正樹「艦砲射撃のこと、覚えてますか、よく。」

蘇さん「覚えていますよ、こっちがボンと頭の上をシュート、それから落ちるときもボンと大きな音がした。艦砲射撃ね。ホーランドディアの射撃の後ね、どこに言っても死体がある。死体にはほとんど生えが集まっている。」

日下部正樹「匂いは。」

蘇さん「匂いはとても悪いですよ。考えられないところですよ。2,3日ですよ。熱帯地ですよ、熱帯地で腐敗

も早いですね。」

ナレ「蘇さんは追い込まれたジャングルでアメリカ兵に肩を撃たれた。」

蘇さん「殆どは服はあの、血だらけですよえ。雨が降ったら血を洗ってね。」 "

"ナレ「捕虜となった蘇さんはオーストラリア、カウラの収容所に運ばれ、史上最大と言われる脱走事件を目撃する。生きて虜囚の辱めを受けず、ぞう教え込まれてきた多くの日本兵が脱走を図ったのだ。警備兵に銃撃され 231 人が死亡した。」

蘇さん「監視第二機関銃がある、その期間銃で撃った。翌日にそのなんやね、トラックでね死体を運搬 b した。」

日下部正樹「それをみた。」

蘇さん「みた。死だけ感じている、いつ私の番が回ってくるかわからない。」 "

"ナレ「台湾中部、南投県の病院。ここに 95 歳の元日本兵がいる。」

日下部正樹「昨日ですけれども転倒して今日今ここに入院していると。」

ナレ「王慶祥さん、フィリピン、バターン半島の部隊に配置されていた。戦争末期のフィリピンでも日本軍が劣勢になるに連れ、補給が途絶えた。植えに苦しんだ王さんは民家から家畜や野菜を盗んだことがあったという。」

王さん「飯粒一つ食べるものがなかった。」

日下部正樹「戦争で、一番つらかったことはなんですか。」

王さん「ご飯。」

日下部正樹「なかった」

王さん「なかった。戦争は哀れじゃ、戦争はするんじゃない、夜中頃に、起きて、一人で涙を流す。そういうことが何回もあった。それが何のためだか。」 "

"ナレ「最前線で何度も作戦に加わった、趙仲秋さん 91 歳。趙さんの軍歴書には、参加した作戦名がいくつも記されている。」

日下部正樹「射ったりしましたか。」

趙さん「射ってます。戦争だから。」

日下部正樹「打つときはどういう気持で打つんですか。」

趙さん「その時、そういう気持ちなんてないよ、私自分が死ぬか死なないかという気持ちはある。」

日下部正樹「それで何人か殺しましたか。」

趙さん「それがちょっと何人ん、いつ、果たしてどんな程度でやったかとかちょっといいにくい。」

ナレ「先の大戦で最も無謀と言われている作戦にも参加した。インパール作戦、インドにあった連合軍の拠点攻略を狙ったものだ。ビルマから幅数百メートルの川と 2000m 級の山を含む数百キロの道のりを進み、わずか三週間で攻略しようとした。補給も届かず前線が疲弊するなか司令部から怒号が飛んだ。」

趙さん「インパール攻略まだかまだか、と私もそこで聞いた。落とせるはずがないものを頑固な気持ちでやった。それが一番大きいしくじりだった。」

ナレ「誰一人インパールにはたどり着かず、3 万を超える日本兵が命を落とした、その 6 割以上が餓死と病死だったという。」

趙さん「食料がないのに戦争ができるはずがない、だからその戦いじゃないところでみんな死んでる。餓死、同じトラックの中で朝起きていたら死んでる。」

ナレ「飢えや病で動けなくなり自ら命を断つ仲間もいる。」

趙さん「引き金を引いてこう、乗っけてバンってそれ。もう何もできない歩くこともできない。じゃあ何する、自殺する以外にない。」

日下部正樹「戦後保障とかね、なんかやってくれましたか」

趙さん「あのね、私がもらったのは当時の貯金。それだけしかもらっていない。当時の日本人として、今でも私は日本人としてそういうことをしている。」

日下部正樹「日本人として戦争に行った。」

趙さん「そして日本人としてやっぱり帰ってきた。今でも日本人。」

"ナレ「敗戦から一年半後、趙さんは台湾に機関紙た、日本兵として命をかけたが日本の国籍を失い保障や恩給もない、戦後台湾は日本と敵対していた国民党の統治下になった、元日本兵や元々台湾に済んでいた人々は打夏され処刑されることがあった。」

日下部正樹「日本だったら良かったよかったって言えるけれど、台湾言えなかった。」

趙さん「言えない。」

日下部正樹「でもお母さん喜んだでしょ。」

趙さん「それは喜んだんでしょう、しかしはなさない。」

日下部正樹「言葉にならない？」

趙さん「そうじゃなくて、やっぱり当時の環境がそうだった。」

日下部正樹「こくみんとうだったから。」

趙さん「恐ろしい」

ナレ「日本人として戦い、日本人と認められなくなってからまもなく 74 年を迎える。福岡県にある、兵士・庶民の戦争資料館今年 6 月、戦争犠牲者を追悼する法要が行われていた。」

武富慈海（兵士・庶民の戦争資料館副館長）「戦争の本当のことを伝えるのが、目的だということで、ずっとそれを、続けましたおかげで、逆に全国に支援者の方がおられる。」

ナレ「オープンから、40 年、民間初の戦争資料館といわれ、元日本兵の遺品に、直接手を触れることができる。」

武富副館長「実際、体験する訳ですから、まあ小さな追体験ですよ。実物資料で、訴えていくと、ということで、遺品が語るという言い方してます。」

ナレ「館長である武富智子さんは、93 歳、こうした形で、先の大戦について、伝えていくのも難しくなりつつある。漫画家の松本零士さん。戦争体験した漫画家は、もうほとんどいない。」

膳場「松本さんが、漫画を描き続けるときに、こう伝えていきたいテーマって？」

松本氏「それはあの、志を遂げるために人は生きているんだと。自分の方向性、それと各人自由であるということですよ。戦争なんかやっていたら、(人類が) 滅びるだけです。だから宇宙でどうやって地球の自然環境と、生命を守るかということが大事なことで、もう争っている場合ではないという気があるわけですよ。」

ナレ「国会議員も戦争を知らない世代が、ほとんどだ。」

金平「戦争をして、取り返したらどうですかということを、子どもじみたことをいう政治家まで登場している」

福田氏「ちょっとね、簡単に考えてますよね。そうですね、戦争というのは、その一自分の意志というものは、どこでも、どこにもはっきり意思を通すとか言うことは、できなくなるという状況ですよ。ね、極限のですね、制限条件が付くわけですよ。そういう状況の中で、おそらく人間らしさっていうものは失うんじゃないですか。人間らしさ。」

ナレ「先の大戦を経て作られたのが、戦争放棄と戦力不保持などを定めた憲法 9 条だ。その改正論議を福田さんはどう見ているのか？」

福田氏「自衛隊を書き込むかという話ですよ。まあそれだけだったらそんなに大騒ぎしなくてもいい感じですよ。安倍総理がこだわっておられますけども、今のままでも国民は納得してますよね。ですから、それ

ほどね、変えなきゃいかんというものでも、無いように思うんですけどねもう少し、広くね、議論した方がいいんじゃないかなと」

VTR を受けてスタジオでは以下に朱記したようなやり取りが繰り返された。

膳場「はい、こちらは、松本零士さんが今回書いてくださった絵。本当に印象的な景色で、これは敗戦 2 日後の夕暮れ何ですね。あの一松本さんの作品を読んでいますと、敵を単純に悪としては描かずに、状況が違えば、つまり戦争が無ければ理解し合えただろう相手というまなざしで描枯れているものがとても多いんですね。それはきっと戦地から戻っていらしたお父様から、学んだことだと、思うんです。で、松本さんのように、戦場を知る人から直接戦争体験を聞くことができた世代にとっては、戦争をしてはいけないということは、理屈抜きに自明なことだったわけですけども、戦後 74 年という歳月に伴って、その自明のことが、受け継がれなくなってきているなど感じる局面が増えてまして、ちょっと心細く感じますね。」

金平「僕は、福田元首相にお会いしたんですけど、まあ今の政治家と言えね、誰がとは言いませんが、俺が俺がという人が、多い中で、福田さんは、お会いすると、まったく逆の方で、なんか、こう、政治家としての品位みたいなものを感じたんですけども、えー福田さんは、前橋空襲の記録をアメリカ国立公文書館から、取り寄せた経験から、その公文書ってというのがいかに大事かっていうことを身をもって知ってるということですね、今の日本を考えると、最高裁判所が過去の重要なね、裁判記録を破棄したり、あるいは、検察庁が、公文書をですね、財務省の公文書を破棄した。森友事件の捜査を終結するとか、福田さんが、おっしゃってた方向とは、真逆の方向に進んでるということですね、私は非常にその戦争の経験という意味で、危機感がありますね。」

日下部「あの一私は、実際に戦争を戦った人に話を聞くチャンスはこれが最後だと、言うつもりで台湾に渡ったんですけども、3 人のおじいさんたち、ほんとに歴史に残るようなね、激戦の地にいたわけですけども、全然別の場所にいたのにですね、口をそろえて、戦闘より、餓死の方が怖かったと、語っているのがですね、戦争の本質を表しているんだと思いました。まあ日本人として戦った彼は台湾に戻るわけですけども、故郷は敵である国民党に支配されていました。彼らは戦争体験を長い間封印されていて、それを 70 年ぶりにね、こうやって語れる言葉ってというのは、本当に重くてですね、日本に対する複雑な思いを意味してましたね。えー日本人として戦ったというおじいさんに、私は返す言葉が見つかりませんでした。」

このトピックに当てられた時間は 3054 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨

特になし

検証者所感

・オープニング：結論→特に問題なし

番組の冒頭で金平キャスターが「終戦から 74 年、戦争の犠牲を経て自由を手に入れた日本はずの日本では愛知県の芸術展で一部の展示が中止になるという異常事態が起きています。大きな意味ではこれも戦争とは無関係ではないでしょう。」とコメントしていたが、「大きな意味では」と留保をつけているものの、どこがどのように戦争と関係しているのかがさっぱり理解できなかった。金平キャスターのコメントを理解できた視聴者がどの程度いたのかは気になるところである。

そもそも愛知県の催しが中止になることが異常事態というよりも、現状でも既に表現の自由が配給制みたいになっており、政府からの自由ではなく公権力が表現の場を税金で用意してやるという、政府による自由として表現の自由が捉えられていることのほうが異常ではなかろうか。

こうした状況は表現の自由が配給制的になっているとも言えるが、それこそ野口悠紀雄氏が指摘するような「1940年体制」すなわち戦時体制の名残が今も残っているという印象すら受け、そういう意味では確かに「戦争とは無関係ではない」のかもしれない。

・【特集】松本零士さん・福田元首相が語る戦争・台湾の元日本兵が語る戦争

膳場キャスターが「松本さんのように、戦場を知る人から直接戦争体験を聞くことができた世代にとっては、戦争をしてはいけないということは、理屈抜きに自明なことだったわけですが、戦後74年という歳月に伴って、その自明のことが、受け継がれなくなってきたと感じる局面が増えてまして、ちょっと心細く感じますね。」とコメントしていたが、そもそも戦争体験を聞くことができた世代にとって「戦争をしてはいけない」というのが理屈抜きに自明なことと言い切っているのだろうか。

あの戦争が始まる前の日本だって日清戦争や日露戦争を経験した人たちが一定数いたわけだが、そうした人やそうした人から話を聞いた人たちにとって「戦争をしてはいけないということは、理屈抜きに自明なことだった」のであれば、そもそも日本があのような戦争に参加することもなかったのではなかろうか。

また、松本さんたちにとって理屈抜きに自明なのは理屈を上回る銃後の暮らしや敗戦の経験があるからで、そうした経験を持たない人たちに「理屈抜きに自明なこと」として受け継がれるということを目指すほうがどうかしているだろう。まさか、そうしたことを学ばせるために銃後の暮らしや戦争経験をさせるというのは本末転倒であるから、そうした経験に頼れない以上は理屈で理解させるより他ないように思える。

ところで、今回の戦争と政治家では福田康夫元首相が取り上げられていて、確かに福田元首相はご自身の銃後の暮らしの話の他にも父である福田赳夫氏が大蔵官僚としてどう戦争に関わっていたのかであるとか、敗戦後の混乱や疑獄に巻き込まれ主計局長まで務めながら次官になりそこねた話など、戦時下だけにとどまらない話題がありそうではある。とはいえ、戦争と政治家ということであれば、福田康夫氏よりももっと高齢で実際に戦場を経験した人の話を今こそ聞く必要があるのではなかろうか。

例えば今年になってからでも、1942年に大蔵省に入省し戦時中は陸軍の主計将校として活躍し、終戦後は3年ほどソ連に抑留されたという経験を持つ元国会議員の相沢英之氏が死去したが、このように銃後ではなく戦場の経験を持つ政治家、元政治家の数も少なくなっている。

著名なところでは中曽根康弘氏や村山富市氏が存命であるが、それでもここ最近で前述の相沢英之氏だけでなく、野中広務氏、吹田あきら氏なども亡くなっており、戦場の経験があったり軍の学校で終戦を迎えたような政治家の数が減ってきている。今こそ、中曽根氏や村山氏の体験談を聞くときではないだろうか。